

# 軍用記

三

			一七四九	和書門
		二四九		
七	九	六		
冊	架	函	號	類

庫	文	閣	內	
一五四		一七四		和書
函		九		
架	冊	號	類	

內閣文庫	
番號	和 17449
冊數	7 ( 3 )
函號	154 2



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



軍用記第三

目錄

鎧威 七大意

六ヶ条

鎧威 七定法

九ヶ条

草威之部

緋威

黒草威

薰草威

赤草威

洗草威

笈繩目

小櫻威

小櫻黄返

蓝白地黄返

品草威



淺草文庫

花迺家文庫

軍用記

三

赤草黃系

綾威之部

唐綾威

練緯威之部

練緯威

系威之部

紅梅威

黃系威

白系威

黑系威

赤系威

萌黃系威

紫系威

紺系威

藤系威

黃檀威

褐色威

系緋威

卯花威

澤瀉威

櫻烏威

敷目威

色々威

紫裳濃

紅裳濃

耳裳濃

紺裳濃

付惣テ裳濃ノ事

黃檀白

妻白

肩白

付惣テ白ノ事

肩白

妻取

腰取

大荒目ノ部

大荒目 三枚草大荒目  
金交大荒目 一枚交大荒目

鉄胴ノ部

鉄胴 カラ胴 包胴

相生相刻鎧 四姓鎧

菱縫扱 威箔

離物 縫延

着長 具足

仲綱維威ノ歌

昔具足當世具足

腹卷 并圖 胴丸 并圖

當世具足圖 鉄胴圖

腹當 鉄鉢

袖驗 笠印

具足ノ守 鎧フト言詞

鎧着吉方 脚鎧召次第

馬喇其外凶兆ノ事

人ノ鎧ヲ見ル事

大將ノ脚鎧ヲ着ス事

甲曹ノ字訓

武具ノ字用

元是くを成  
 甲魯くを成  
 大維くを成  
 小くを成  
 成其くを成  
 成其くを成  
 成其くを成  
 成其くを成  
 成其くを成  
 成其くを成  
 成其くを成

軍用記第三

護威毛の大意

威毛といふはれど一ハ款の目をおどすを  
 云ふなり毛といふはれを綴たる糸のありと  
 つらありたるが毛をふせたるごとくあるを毛  
 としよふ毛といふも同じ之革れど一  
 護威の毛といふも同御あり  
 護の毛といふ毛のまじり一糸院御代のま  
 じりなり保元平治のお徳より以來代々

伊勢貞丈著  
 千賀春城補



目を付く者もあらずしては統ありきたるを  
心なり故にあつたをよき武者よと目を付  
祇つてを人こせと武士の面目あるべからざるに  
つけぬるまををれそりく思ふに戦場へ  
出まして宿を居て款具あてをかりて休  
しかくまわらんをあふあげもあつてあり  
しきよき標取け武士あるべし  
威毛のよりいふは折れ何れと古何天  
或ハ何が大お何がと云體工よれとを  
何方のとまじは務あじより始るあざ  
そ由末を委くの一たる悦いともあり

正しき古より曾て又さるよりそし彩よ作  
どたる偽悦あり月づき  
この何とつれどしハ札の形を何の形よ  
作り何とよぬり何とよの毛よれどし何  
との身系を引べしあざの札の形札の系  
のまし身系木をより合ておどし毛の名を  
する悦身より中りのや古は曾てあざ  
あり皆彩の他とある故悦一せざるに  
體れどし毛の定法  
札の形ハ割小札を本式とさるありとさめく異  
形よさるハ異候あり

札の色ハ赤漆子ぬるあり是古の定式あり  
たまく金糸糸もたむけハ銀箔糸漆も  
漆もさかきく暗黒色あり  
札の色よりよりハ毛引もさるあり是古の  
き式あり大昔ハ格前のものこ  
威毛の名目ハ系威ありハ系糸の色斗せ  
ゆくと名づくるあり札ハ赤漆もしろ金糸も  
しろ札どしハ毛の名ハ札の色形もかろうる  
りあり革威ハ草の色後威ハ後の色を以て加付之  
籠の耳糸をよむハの糸もゆふ耳糸ハ  
啄木の紐を本式にさるる之列毛の色ハ黒

二色の糸子  
ハ松守を二  
毛しつひて  
よげしつふ  
よ似しつふ  
人よしつふ  
啄木の耳糸  
もて二毛ハ  
ありぬ

儀あり耳糸よ啄木の糸を用ふるよりハ先  
祖のよらひを子孫に傳つて名古よりその  
人の姓に合ぬ毛の色ハ籠もても啄木もて其性  
よありぬよを札をさるあり啄木ハさくしの  
糸を祖交する相あまハ何色ともかづ  
のぬ糸性よ合ぬ色を札をた理あり  
籠の綱の糸ハ一面ハ深草もて包む之を  
強走といふありは強走の草ハ何色もあれ  
威毛の名目ハかづりぬありを代の籠ハ  
法走あり紐どともあり古の籠ハ替りたり  
を代の籠も古のよらひは強走に威毛ハ



草摺の袖の  
のひし縫の  
糸のきり威  
毛の名目子  
りていむ

曹の眉底吹互襟の袖の冠の板左太の草摺の梅塙  
付芳の草のきりハ何色よてもねてしそまかすき  
ねとす一毛の名ハさす袖と草摺ありそねハ  
細のあハ注走のほよて包む也てんてう一ち  
の方ハ母羅衣<sup>かろがぬ</sup>を掛まハつてすうてんるま  
味袖と草摺ありあり條て古人ねど一毛の  
名を付てするあハ會袖と草摺ありあり細の  
きハ地さしに陸ふあり地色はハ草摺一ハ紅を  
そどあまハ細をバ味う以紅の一さだりり  
さるちりるそ外の毛も押てまぶづ一  
襟の言細あげまきり結紐指の結袖の水香  
の結ホのきハ何毛もあまねと一毛の名

目よりさすも也

曹のねど一毛のきりハ何色よてもねてしそまかすき  
のうまをりりあてあまきあを刺るも左のきりあり  
曹の結のきりも威毛のあまてうまもねて  
右九ヶ條のねど一毛の定法の正傳あり是よりさる  
きりり後ハ正後よあまはたはるまを左のねど一毛  
のあま留右九ヶ條の趣を以て考づ一

草威の部

上右のよろろひの皆草を以てぬひし一物まハるも威  
本とまぶ一後よ系ねど一後ねど一あまハ出来  
し一草威ハ深さるねりまを細く裁くま端を裏

軍三

五

不

裁

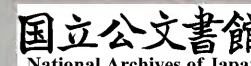


多を合せ礼おしるるぞう般しげある色をえりて草葉人の  
多は皆袖をさぬしるる中し波多世に雑たごしのよらひの  
袖の波草もやありぬんそ又さうり軒印袖の毛はあく深もえ  
雑たごしの袖をあらひたがうてさうりまぐちあふべいとひんあり  
ささうささ紅のうらを洗うるといへぬゆひひさるあり○其據曰波  
草遣平家物語同長つ年盛衰記を平記平治物語参考保元  
家傳武具制庭訓参考太平記  
およびさうり尚新抄抄まよるるを

第繩目たごしハ梯繩目据素目ふらふらありあつていふとあ  
草まで威まきさうりあつていふとあつていふと白く爲まると  
とんのまどをもつらおし深さる草ありを草をた  
てよ細く裁ていをのづうまくのよ繩のめくふ  
ひまぜの繩のやうよんありさわらふら繩めと云  
あり急たごしよふらふらありあつていふと威ハありらま  
たごしよのざうりさうりさうり  
其據曰第繩目のよらひ威は衰  
記平治物語平家物語同長門

本葉強記を草記ある。圖ありまよるるを  
とえらうり尚新抄抄記を 圖ありまよるるを

小極草たごし又畧して小ざら威とも云あり  
小ざら草といふ草をたごすことざら草を  
藍地よ白くちんさく極のむがを深出たる  
草之急たごしよ小ざら威といふおし毛ハ  
あきあり草たごしちりり  
其據曰小極威は強記庭訓  
雑家武具制庭訓又素雑家  
高麗草子赤松物語ありよ  
とえらうり尚新抄抄記を  
小ざら草をたごすよらふら威といふ小極草を  
藍本地よして極の花をたごす深さる草より威  
たるといふとたごすよらふら威といふの藍地白紋の小極  
草をたごすよ深さるをいふたのごとく深さるせハ地



源平盛衰記  
印板のなまじ  
赤草たどくを  
赤草の威と

ハレのぐうらぐうらぎもろよあすさくくハ草よあたる  
見又赤たどくハのけ名あり草たどく斗春珠曰く  
保元相傳ありし時長門中参考  
草れを黄よ返すはるひとみまつく白地よ  
草紋ある草を右の小ざらるを黄よくく  
く深きく草よてれどたるをいふ是もいと  
たどくハあし草たどく斗春珠曰く白地を黄よ  
削まり之は保元物種ハそりてえりけ余の古也といはれん  
あり保元相傳の文形影影ハ赤らと又黄白地を黄よくく  
ハ地ハ黄よありけい草れどく  
はるひとみまつく  
白く草のあを二枚むらひ合せ本のたどくち

赤草の威と  
赤草の二名を  
やまうて定こ  
る

ちがくく形丸くあかより白ひ合せたる紋を志げ  
く深き草の倚く藁草とくあ又赤草四名草  
赤名草ありけい草れどく  
赤草の威と赤草と黄草をいへ一  
一赤よくちがくく又ハ上と下とを遠くたどく  
まろくハ赤く草をいへたどくすなり赤草黄草の  
の限つた何系よても一きん赤草のあかひ  
赤草のあかひ赤草のあかひ  
くちくす

赤草のあかひ  
赤草のあかひ  
赤草のあかひ

紫草威藍草威ぬまぐまれど一馬草威あぶら  
香そのれど一たる草を以て威毛の糸をよふた列  
の子細ありくま一くわ志るまよふす

右のぬ一繩め小ざくく品草ホのれど一毛ハ皆  
かされど一之種るををせまうぬ人の糸れど一の  
糸れど一を糸他一を志りくまあよ合せんと  
しそまぬくこ一ね一ゆ一する偽後ま一はまふ  
づうくまあよ志るまを和の草の後品ハ古き鑑の  
威毛を以てくまうま一和の他をよふあうま  
草威藍草威ふま草黒草威ふま和の多まはらよ  
まあを畧を和草あられの糸よま考をべ一

後威の部

唐後れど一といふの唐云より後りける縷を細  
く多うまうまをよめて糸威のごとくたすくまの  
品あるべ一何色の唐後威といふべ一昔々の  
唐後をふくくまこれど一する鑑ホと舊地よ  
もつてより糸威よあやねど一といふあまを  
これのまをまうまのあねどもんたさへあるゆ一なる  
一まうま

練律威の部

練律威ハ練律を厚く細くたをまひくれとまあり  
何この練律威といふべ一まハ極々好まするべ一練

練律ハつまり  
まらりのめ  
あり

律ハ律ハ生るマ律ハ律名マてわりケル殊律  
とケル之律律名マてケル名威ハ律律名トケル名ハ  
あきマ

系威の義

紅梅威黄志れど白志威黄系威赤系威黄系  
れどハ系系威糾系威ホハ別の子細あり吾々も  
の系系れどハ系系威曰右ありの志れどハの義  
糾系系威ハ

黄威とつハふド志志れどハ系系の系系威  
とケル系系威れどハ系系威とつハふド志志れどハ  
系系威とつハふド志志れどハ系系威とつハふド志志れどハ

百首正秀

順徳院

二トめりヤと  
志志の村の  
トもみぢぢ  
志志も志志  
文意二年毎  
一首の中  
氏アタシガ家  
あり双山志  
志志の志志  
志志の志志  
志志の志志  
志志の志志

黄れどハ系系威とつハふド志志れどハ系系威とつハふド志志れどハ  
れどハ系系威とつハふド志志れどハ系系威とつハふド志志れどハ  
黄檀威とつハふド志志れどハ系系威とつハふド志志れどハ  
黄檀威とつハふド志志れどハ系系威とつハふド志志れどハ  
とつハふド志志れどハ系系威とつハふド志志れどハ  
の本ハ似たり



を志るべし 英株曰緋威のちらひ参考保元志田草子等録  
草子ありて

弁のむねどし白糸と藤黄糸を以て威を白の  
色花本の糸のまきし白糸を用ひ袖糸どりの下

二條をもえぎて威を 英株曰弁威の儀は保元平治  
保元物終はまは紀文正徳増徳を  
判徳来同兵制庭判尺糸徳来子録草子  
糸草草子ありて

洪得威ハ二色の糸を以て 紅とまき一色ハ地まき

一色ハをたりの糸のまき云岐の形を袖草

まき威を地まきと波の形も何とまき

るハあり何とまきも月也 網ハ地まきあり

送法得れどしハ 左様曰おもあり

物終おもあり 高給物終おもあり

高給物終おもあり 高給物終おもあり

えいごまハ  
飛このま  
あり

叩きハ  
あり  
あり  
あり

撥多威ハ 鳥の羽を似せ

大まき むねどし

まき だしのあり

斑の文あり お月のまき

まき あつちあり

の糸 よす糸をまき

まき あり

あ まき

古歌 あり

朝 あり

あ あり





をけしよしきとてこゝんよとてとていふは強あり又裳緋と書  
 從あり是を月内づいん。本株曰は裳緋のよる平治物  
 語同参考平家物語同門中裳緋能盛衰能太平記能合  
 大草後早後集采買制卷制等よとていふ尚能抄よとてい  
 紅裳緋の袖ハ薄紅能あり袖草摺ハ薄紅中ハ中  
 紅下ハ本紅とていふとていふこととていふこととていふこと  
 一後よ由を紅ししてとていふこととていふこととていふこと  
 紅ハ赤まりん不用とていふ本株曰紅裳緋の體東能  
 方平治平治物語ありとていふ尚能抄よとていふこと  
 耳裳緋ハ耳能綴耳ハ袖草摺の體入り支能と耳  
 を裳緋の如くしきとていふこととていふこととていふこと  
 を以て濃きとていふこととていふこととていふこと  
 裳緋ハ薄紅とていふこととていふこととていふこと  
 濃きとていふこととていふこととていふこと  
 中ハ赤まりん不用とていふ本株曰紅裳緋の體東能  
 方平治平治物語ありとていふ尚能抄よとていふこと  
 耳裳緋ハ耳能綴耳ハ袖草摺の體入り支能と耳  
 を裳緋の如くしきとていふこととていふこととていふこと  
 を以て濃きとていふこととていふこととていふこと  
 裳緋ハ薄紅とていふこととていふこととていふこと  
 濃きとていふこととていふこととていふこと

さらし濃ハ何とていふこととていふこと  
 してとていふこととていふこととていふこと  
 紅とていふこととていふこととていふこと  
 何とていふこととていふこととていふこと  
 黄檀白の體といふハ上をたぐとていふこととていふこと  
 袖草摺の末を黄とていふこととていふこと  
 威とていふこと  
 本白ハ上をたぐとていふこととていふこと  
 黄とていふこととていふこととていふこと  
 本株曰本白體盛衰能平家物語本  
 尚能抄よとていふこと  
 威とていふこと  
 本株曰本白體盛衰能平家物語本  
 尚能抄よとていふこと

妻白といふは袖の下の方を  
の支障をさし落くをいふ也  
て袖草むりの支障をさし落くをいふ也  
又落くをいふをいふ也  
肩白といふは袖の下の方を  
をさし落くをいふ也  
又支障一筋をさし落くをいふ也  
あるが肩白の肩の字が  
之肩白と書くは白とよむ  
とよむ皆同例  
肩白妻白といふは  
沉香葉を

何白と云ふ耳  
糸を白の糸  
と云ふは別  
に耳糸の糸  
と云ふ也

の白の多し物の香ハ  
はうまきある也  
腕又ハも  
て上の方を  
その下の  
襦のれど  
あま  
肩白といふは  
威毛

三  
三  
三

脛を白くまををりふくまをくくぶ赤威肩白と云  
ハ赤威ハ惣袴を苗深の糸よそれごとく袖も赤  
威よして袖の上二脛むうりを白糸よくたを  
あり  
妻取ハ妻ハ袖草摺の支摺を云取ハ糸ごとく  
といふゆゑ袖まをりハ支摺を別々の糸にき下  
取とあつて後幅をとりたる極よきごとくあり  
何とこのれごとくまもつまをりをさぐり好くま  
まぐり旧ハ白糸テつまをりたるは後あつてあるハけり  
つまをりたるを耳糸を引たるは後ハ後ハ後  
ありつまをりの極よ耳糸ハ喙本を用る

こゝにハ草まをりのゆゑの糸を別々の糸を  
つまもりたるはつまをりたるをけりして  
と申すは妻まをりの糸も同じの後威惣寺殿  
兼良改の尺素往來ハ禮のりやあひり文よ或  
ハ取妻或ハ取腰と申すハけり  
右威毛の名ハ皆田能よんり右の外氷奥  
威ハ音威威麿毛禮雪日威あつてを始として  
さまぐりの糸をとりたるは後ハ後ハ後ハ後  
よんりたる名目あつたは後ハ後ハ後ハ後  
大荒目ハ部  
大荒目と申すはれごとく毛の名ハあつてこれの

三  
十六  
承  
三

三三  
五堂

大あゝめ今  
まかけふふ  
は同一

やうの名は大あゝめこれをおれよせむれのおしを  
まがさむま切らるるなりこの大あゝめといふやうい  
大あゝ同一 あまゝめあまゝめあまゝめあまゝめ 大これをいふやうな  
あゝくゝるをまゝくゝるこの大あゝめといふを  
小荒目といふやうい

二枚葉の大荒目といふおれをゆきよき草一枚  
まがさむま切らるるをいふこの大あゝめといふやうい  
まがさむま切らるるをいふこの大あゝめといふやうい  
あまゝめあまゝめあまゝめあまゝめ

今草一枚の大荒めといふこれ草二枚のまがさむま切  
板金をまがさむま切らるるをいふこの大あゝめといふやうい  
まがさむま切らるるをいふこの大あゝめといふやうい

一枚まがさむま切らるるのまがさむま切の  
まがさむま切 草子盛衰他参考係元義種記保元物語  
まがさむま切 草子盛衰他参考係元義種記保元物語  
まがさむま切 草子盛衰他参考係元義種記保元物語

### 新細の類

あまゝめといふおれをゆきよき草一枚のまがさむま切の  
あまゝめといふおれをゆきよき草一枚のまがさむま切の  
あまゝめといふおれをゆきよき草一枚のまがさむま切の  
あまゝめといふおれをゆきよき草一枚のまがさむま切の  
あまゝめといふおれをゆきよき草一枚のまがさむま切の  
あまゝめといふおれをゆきよき草一枚のまがさむま切の  
あまゝめといふおれをゆきよき草一枚のまがさむま切の  
あまゝめといふおれをゆきよき草一枚のまがさむま切の  
あまゝめといふおれをゆきよき草一枚のまがさむま切の  
あまゝめといふおれをゆきよき草一枚のまがさむま切の

三三  
十七  
五堂

色相といふ所の右の陰相を純子孺子或ハ深草よ  
て色をたる〜色相といふを鏡の相をつもりて  
ふゆふの段ありあやまり〜

右色相といふ所の左の陰相を純子孺子或ハ深草よ  
る名目より〜向用より〜  
右側同左相行  
あり口相口相令  
相相は相空相赤地純子孺子色を〜金相  
あり〜名目右相より〜尚於於抄より〜

相生れ刻の鏡

相生ハ赤なるは青ニ相刻ハ赤なるは凶あり人の五性よ  
より〜吉凶あり

相生の威毛ハ 木性水生の人の黒色火性の人の赤色  
土性火生の人の赤色 金性土生の人の黄色 水性金生の人の白色

何れもさる

相刻の威毛ハ 木性金刻の人の白色火性の人の黒色  
土性金刻の人の赤色 金性火刻の人の赤色 水性土刻の人の黄色  
何れもさる

吉凶右の〜ヤあり〜たねども〜吉凶よ  
あり〜と〜あり相生の鏡を〜  
たり〜とも忠義を志す武勇をたげまはる必且  
ざらひをの〜べ〜

四性の鏡

源氏の黒色平氏の紫色藤原氏の黄橘氏の  
黄を月田是ハ 清和天皇の所附園白良房云

具足の下と  
ついでに  
さうくぬひ  
るもつーあり  
又お様の能  
て草の扱は  
神の目や  
ちづーき

勅命をうけらぬりてめは定め給ふもついで  
一説子の村上天皇の御天曆年中定めら  
ともえけぬ後ともよせよや習うべし  
正しき記録古書は曾ていふにさるるあり  
用ひよとらるるに此様の様とて定むるに  
あつてあり

雑記

曹の志ころ面頬のとらりあけ様の袖はさうせ  
んぶんの板あどの縁の板をハ部一様の板といふ  
葦燈あるとてむしぬひの板をハ何事もあらず  
くれー角のさう板も葦燈を黒糸と

カフドニ

様のうらむを包む織物をいおとーぎぬとらけ表  
ともついで草よて包むをたてーきぬとらけ  
尚世具足はあり正武古制の  
離物とらる事柄の威毛と柄のたどー毛のまじ  
あひさるをえと  
燈延といふハ様の柄の射向のまきをてつづひ  
よーさるお如葉ーより後古の様のまじ射向の  
根とつづひあつてそのへ角あるをぬひのつづひ  
あり  
よろひをさせるとらる大ねのハ燈よかざりて  
よいといふハ非之平侍のをもさせるとらる大ね

軍三  
五  
五  
五

よりひらひら  
の二つのお  
くしき後  
の敷わたり  
小くそくと  
あり

のをがはの字を添へてはをせとそとせせととの  
證の吳名之綱丸後集あどふきけ短く證ハ草  
むりあきとた名とくつふありと若者とくつふ  
まろく又後まのつを若者とせしむる人あり  
後之 在珠曰兼管とくつひの修後よあつて後ま後ま後まあどハ  
の方よりききとくつひの修後よあつて後ま後まあどハ  
りきせまあつてつひの修後よあつて後ま後まあどハ  
きせまあつてつひの修後よあつて後ま後まあどハ  
是後集のよりひのつをきせまあつてつひあり

伊勢武者  
後にもあり又  
表記ハ作者  
伊勢武者と

字之物のこつ柄ひらけめあきををそとくといふ  
軍陣の具足といふもの一役は太鼓のをよらひ  
といひ平侍のを具足と云又一役は昔のをよらひ  
といひ曲世のをそとくといふ役ありけは後何れ  
れも非之程余年中初より御鎧白糸 是玉被管  
中ノ宿老兩人シテ持テ出ル時役人出向テ土手勤ス  
此人御具足ノ右ノ方ヲ受取看是玉被管ともくそく  
ともくといふは後之太將平侍の若別あり昔今の  
別あつてつひをそとくといふ

軍三  
二十  
伊勢武者



つゝあ文字を  
白見黨とあり  
又末の七字をか  
うりぬふいと云  
むかりたり  
とあり白見黨  
ハ伊世の團白見  
とふあゆみ  
あり

兵部威の禮堂で宇治川よきなりを又して侍立る  
仲調源の孫りよみしう之宇治川よ氷奥といふ  
あるよりのよせく郷れどしをよめる歌之け歌よし  
後人少る威といふ威毛を仰りおせり仲調う歌を  
郷れどしと少奥は名目古威は名目古威よあは  
昔具足南世とてくといふのむういかにそくハあは  
あるよき後世よあはをせし禮のみん南世のくをく  
といふの儀奏郷れあどの形のごとく御櫛を御さしと  
右の編みて引合せ後むし是障子の板せんあ人のい  
鶴尾板逆板あどもあく草むり七板下り御を二つよ  
あるやうよしと甲も吹返りあきもあり吹返りあは

を代のよりの  
のふそくの  
中へ眼と云  
物ありけきの  
下をささくお  
んたのふお  
よしてさ病  
及かこの外  
や通世ハを病  
たくのま他  
多うのパー

又ガ一是ハ應仁年中の大乱なりとあつてきくも  
より禮の仰り板もんの好まよまうせし仰りし禮  
よららひよ昔あうりしとくし禮堂再拜のくも  
あうり口しとくあはむいふおを仰りしよららひよ  
昔ありし法走障子板そのおのおをもたふききて  
たよよしと昔禮よううりしとくし弓馬故  
實によかそくを人のえんとあうん付持ておもひ  
南世のくそくあはむいふを授てんせし  
とくし書應仁以後のくあはむ南世のくそくと  
いふあはむいふとくしとくしとくし  
昔のくそくあはむいふとくしとくし

尚世のぐさくらのつらぐさくらのきかた様とくらしきとくらし

在陳日記は  
往きよのよひ  
おてあけきせ  
そよいせ様を  
とくしげんを  
あやかりあり  
美濃のたの  
體へてんが  
をりてんが  
おのせまて合  
さるたが板  
も又せいせい  
をく板の板を  
えんはてんが  
きくあせせい  
とくしげんを  
とくしげんを  
たきき

後世のより見の背を合さるる合せあは資板を  
あはむがし合さるるやうな形りさるもあり袖を  
を代に袖あるもあり又障子板鴉尾板せんぶんの  
板強をさるるもあは草摺の前後た合せて  
七板ありしれ毛引おのりよりらひのぬり古代け  
後世を重毒移衣あどのゆよあはさるるを中板  
まるといひし下さるるまきとくしお別よのまきまき  
重毒かり衣おのりよあはさるるを上さるる巻とくし  
東鑑下學系室町日記参考保元参考平治参考太平記  
随兵日記光源院殿記月記万葉歌次書およんてり上後

奏下版板など毛あの 圖末よあはさるる  
り板板板あはさるる

細丸のより又筒丸とわかく細をうとくさる神丸く  
竹の筒のごとく見のたの板を合さるる編摺あ  
又障子の板強をりせんぶんの板鴉尾の板あは  
あはさるるそのよは相引の板をさるるあを重毒あ  
形よりそ背の袖もあり若まきりのあ後合ての板  
ありしれ毛引をお強のごとく  
細のより細丸板の一段をあがきよあはさるる體の  
とくしあはさるるあはさるる  
今川氏日簡丸盛義記下學系室町日記  
板板の圖末よあはさるる

腹あきの事

後苗の種後米未をよせざして身種よき世に  
 るに於ては後神をよぶるに又人の心よりして  
 下は意なきものもあり後苗の半は後神の  
 育くまへしてさうけよとづるに亦くも思くも  
 ぬるにさうけよも細くおよりた方のまきし  
 思へうしうまてこそせまうけ下の結を結ん  
 後苗のゆりを下をさうけといふ人非之下をさ  
 といふの由をさうけといふ人非之下をさ  
 りをさうけ下後米といふ別はありよあうど又  
 後苗のゆりよさるるに  
 万務の世はありて  
 高神の世はありて

高神の世はありて  
 万務の世はありて  
 後苗のゆりよさるるに  
 下は意なきものもあり

袖のつり

袖のつりハ結を二ツよおろし申を裁づー長きハ  
 袖一あけよまきづー何れも折れまきをぬひハ表は  
 よまきづー帯をよハ結をよハ裁づーまきハ  
 袖一あけよ袖のれ二枚だけよまきづー袖は折るよハ  
 袖の毛をさうけしてまきづーハ折るよハ  
 そがさるるにハ折るよハ折るよハ  
 一よせてのくづー  
 一は傳と曰袖なるにハまきづーのまきづーのまきづー  
 文字をさうけ神名佛名或ハ後米をさうけハ大粒の  
 ぬるよまきづー一裁入形まきづー折よ款身方をさうけ

高神の世はありて  
 万務の世はありて  
 後苗のゆりよさるるに  
 下は意なきものもあり



申差さるるのり結二たぶを旋遊しぬくべし  
申りよくりちくよ細く竹を削り入る下のり  
りよ細き組をへくはよあへ吹口をねねやよ  
組の端を曹の吹口一の月つる結ありを結よ  
育るゝ家の取あひしよきよ天三寸と竿をき  
き天七寸あり  
右の竿ハ終りてゆるべし一本立の竿ハ風取の附  
とかり足しよろざる末の図の如くをきをき  
小差すのりよき一尺三寸をくりぬきぬるての本  
を削り入る結よしつと藍草よきく纏らるる  
べしよも藍のよき

右銘文終の附ハ文合銀精好の附ハ黒字を用ひ  
あり勅使の下家の後五べし小差は是也圖末よ  
竿き天七寸姓のよき竹を削りてきべし藍草  
むとんとんがうよむきとん圖末よ  
右の竿ハあよきるしとるてと一本立のさか  
を用ひる竿の既とるしとる取たと一尺三寸の  
きそのの曲る厚り七寸と  
笠は付るしりゆひめのけんをあ方を指しあき  
あり申の流ハ射向の方ハあきとをむる也  
ハ傳子同右の笠とるしとの流文七星九耀由輪  
ハ八宿栴天帝釈摩利支天に限るしとる定法

△  
具足にちし  
一人よたの  
すん字やち

よあつたを款才をえんたへきるの位高きうあれ  
ハ錦文又ハ紋あるのハ大将のんよまうせ何あり  
とも利ひらるるべしきののりも定るに好よ任を  
べし袖廣も益原も徳軍勢一極よまうべし  
△落大上  
まん字の式け字の麻利支天の字の二書よ胸板よ  
よハまん字をのりてまん字の可け字の大日のま  
三書あまの袖よまうりく字をまうりく字ハ  
け字の阿弥陀又大威の字の改よをけ字よハまん字を  
のりて改よをけ字の才よりて天造魚んのりよ一字  
金輪ホロシこんろんをまうホロシまん字金輪をまう日  
面よりまうりく字よ不動の兒をのりてセシマン氣むく是

不動の字け字をまへまうりき  
同動信のりたの袖よるん矢をるん幣をた  
より赤穂ひりりて後ハ伊勢大津ハ懐大著  
薩を動信ハ次よたの袖氏神を動信ハ一書  
曹動信押付の方より梵天帝釈ハ天玉七星九  
耀二八宿を動信ハ次よ曹と矢と幣とをた  
せくまんりりて座してお座子のるハ被甲次よ  
中尾の後をりたよりて改おまうり弾指ナカトミと  
送るまうり又甲の加持の附被甲後身このの  
後も形ふへきともしも形ふまうり  
きともしも形のり改おまうり

むろのくじん

具足このの字のり麻利支天と書く一字ハまうり

のたあし  
名はあし  
のくしん  
あしあし  
しあし

麻子の字ハ由目の子り付の字ハ有利の字ハ射向の  
袖ハ付支の字ハるるの袖ハ付支の字ハ馬ハ付る  
あり縁まで継ぐむべし  
ちらひをさきまゝのりをよろやとちのりたよりある初ん  
何る後よまを肩さるりのハよろやとちのりたよりある初ん  
そくそきまゝのりおのぐまゝのりたよりある初ん  
那ハ支を肩さるるも継ぎまゝのりたよりある初ん  
具はまゝのりおのぐまゝのりたよりある初ん  
よろひあしをたのりたよりある初ん  
あしを帯さるる者もあしをたのりたよりある初ん  
いどの衣士はらちをたのりたよりある初ん  
よつがひとさきまゝのりたよりある初ん

貞夫曰悪日悪  
おもあつるか  
くわいふとあ  
あつるか山  
ともあつるか  
ども法軍勢  
の内はらんま  
るんもあつる  
んのおろちお  
ハ悪日悪日を  
つむべし

鏡きる射吉子のり関神のすへ白づり  
めのおろちのりあしをたのりたよりある初ん  
すへりあしをたのりたよりある初ん  
あしをたのりたよりある初ん  
その白はるあしをたのりたよりある初ん  
すへりあしをたのりたよりある初ん  
すへりあしをたのりたよりある初ん

法鏡をたのりたよりある初ん

牙一 小袖

牙三 下の帯

牙四 脛巾

牙五 袴巻

牙六 高深一

牙七 小口 小口の形にせよ

牙八 高深高 次丸

牙九 曲かけ 次丸

牙十 袴 高深高にせよ 水の中に入るにせよ

牙十一 正ぎ 鏡 次丸 小大に 正ぎにせよ

牙十二 鏡 次丸 高深高の腰帯

牙十三 高深高の袖くま 次丸

牙十四 脇楯 次丸 鏡

牙十五 鏡の上帯 次丸 正ぎ 次丸

牙十六 刀きやま 次丸 次丸

牙十七 征矢 次丸 次丸 次丸

牙十八 弓 次丸

牙廿二 征矢

牙廿三 征矢 次丸

牙廿四 征矢 次丸

牙廿五 征矢 次丸

牙廿六 征矢 次丸

牙廿七 征矢 次丸

牙廿八 征矢 次丸

牙廿九 征矢 次丸

牙三十 征矢 次丸

牙三十一 征矢 次丸

牙三十二 征矢 次丸



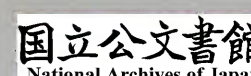
ありきざねばいごん難し〜と、其の用はむまどりのあり  
 よらひをよめをやくとるものも武藝の一ツ  
 大お出陣の附はぢんりのつとひあり、武の者よしてこ  
 秋多き〜は後ありは附甲内目をまゝして麻札よこ  
 をうけてこ秋多き〜は後終ておきあふ附中門よて  
 ちかたき征矢有ひあふりま〜は後終ておきあふ  
 よ持とせ〜は後終ておきあふ附中門よて  
 大お軍出陣の附はぢんり〜は後終ておきあふ  
 後人は曹を巧みよはせたるのむざをうてつとひ  
 より後の方の法よたのむをうけて陣の固たのむを  
 かく〜は後終ておきあふ〜は後終ておきあふ

ありきざねばいごん難し〜と、其の用はむまどりのあり  
 よらひをよめをやくとるものも武藝の一ツ  
 大お出陣の附はぢんりのつとひあり、武の者よしてこ  
 秋多き〜は後ありは附甲内目をまゝして麻札よこ  
 をうけてこ秋多き〜は後終ておきあふ附中門よて  
 ちかたき征矢有ひあふりま〜は後終ておきあふ  
 よ持とせ〜は後終ておきあふ附中門よて  
 大お軍出陣の附はぢんり〜は後終ておきあふ  
 後人は曹を巧みよはせたるのむざをうてつとひ  
 より後の方の法よたのむをうけて陣の固たのむを  
 かく〜は後終ておきあふ〜は後終ておきあふ



いまいしきりある時あづきをかき持て軍部を行き  
あのはらてくしを切るといひきこれの障難ありとぞ  
人の體をいそする時いせんかをいそしけは射向の袖を  
いせはちの袖をいそしねもよりあより曹をいそ  
べー又あをいそしては曹に射向の袖はちのちかゆはよ  
えよべーしうしうをいそしゆりまづしきそを押付を  
いよしちさくれはるはゆりまきより徳角をいそしうーお  
わむし袖いれにうきおもしろもあつたきは稽こ  
ゆもよべーしおかおをいそしうしきよらひをいそし  
てはへぬあへ曹だうしういそしゆりまをいそしうーちえ  
ちう回あ

大おの内ころひをさぎしけは依はる時の脇楯をさし  
稽のあよあきそまきべーさよの脇楯は稽の内よあ  
てまきするおあまきとも大將の内ころひさきする時の  
ちのころひまきするはちいもー大將を稽はさねん  
しを射いせんしあよまのまをねくめさせやう  
がとめよ稽のあよまふあをささるは是故案と  
是はは稽まあの人あは稽と  
甲曹の字のあゆ甲いよりひは曹いよりとと東艦も  
ちのむく月ひより源平盛衰記をけよちのむ  
は月ひより源平盛衰記をけの法出はは多く甲  
をうづく曹をよりひと月ひより法保に甲士甲と



柄とては甲の甲の一文字よりして大體とも是を云へ  
 武重の文字を代りての文字を出してそを又字の  
 付てまゝの形況をもあけく柄を垂るるのたを  
 へはどふべうは由の腰ハ腰の字を用ひまゝに云死と  
 出りけまゝ板の形狀板と云へまゝの形狀板と出りた  
 る形をまゝに只中まゝのまゝの形狀板と出りた  
 まゝの文字を漢字にて書くまゝの形狀板と出りた  
 この皆是を代り人の形物として人を迷まを考へ用ひ  
 物よりして文字の形をあらわすまゝの形狀板と出りた  
 まゝの文字を付るゝの形

フニナ  
ノ草ノ圖



アイ白地ノ草ノ圖

品草ノ圖



同キニ返シタル草ノ圖

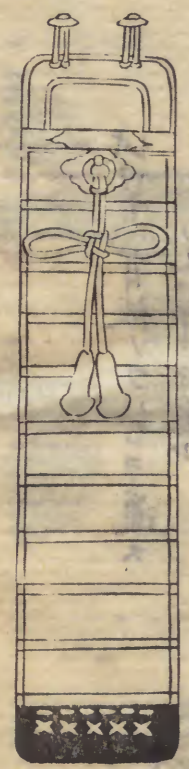
同キニ返シ  
タル草ノ圖



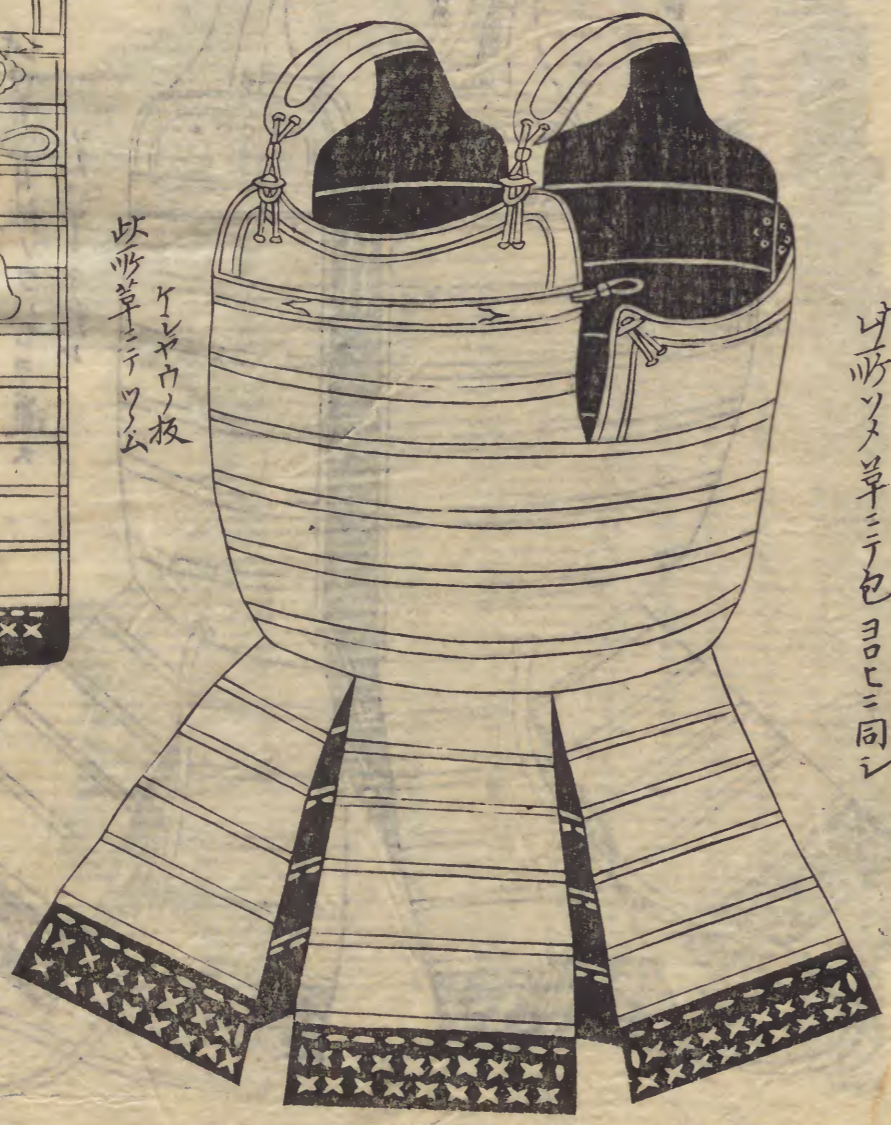
小ホリ  
草ノ圖



振るお



此所草ニテワ公



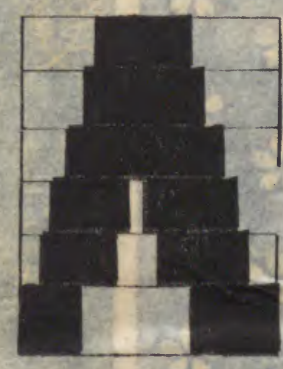
け所ソメ草ニテ包ヨロヒニ同シ

小札毛引ヨロヒノ如シ

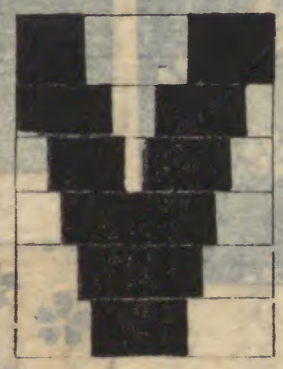
軍三

二  
琢堂藏

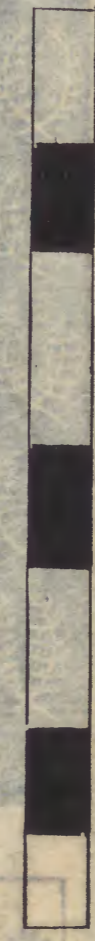
ラモタカラドシノ図



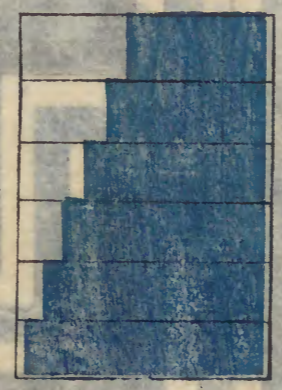
サカラモタカノ図



カシトリ威ノ糸ノ図

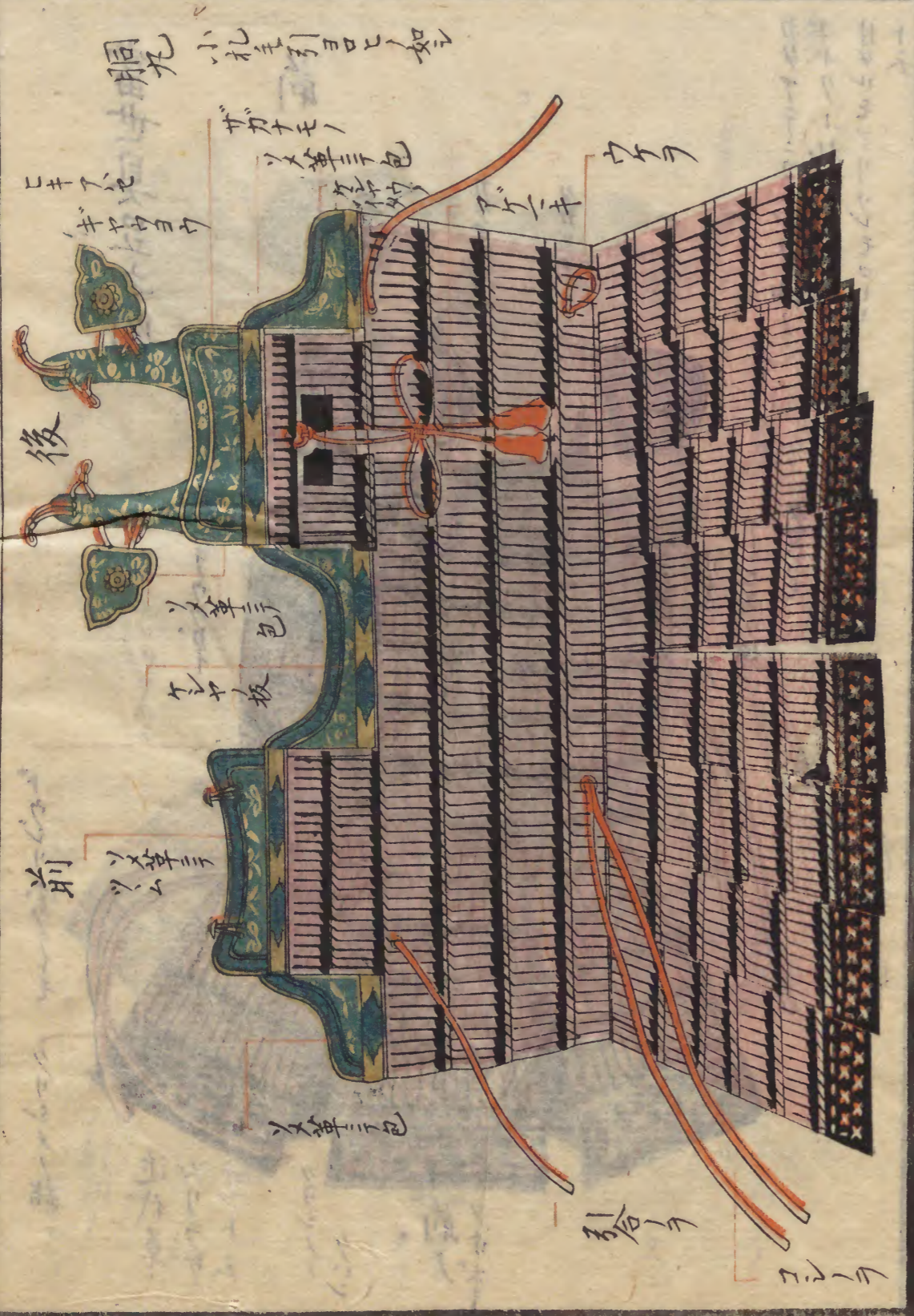


シキメノ図

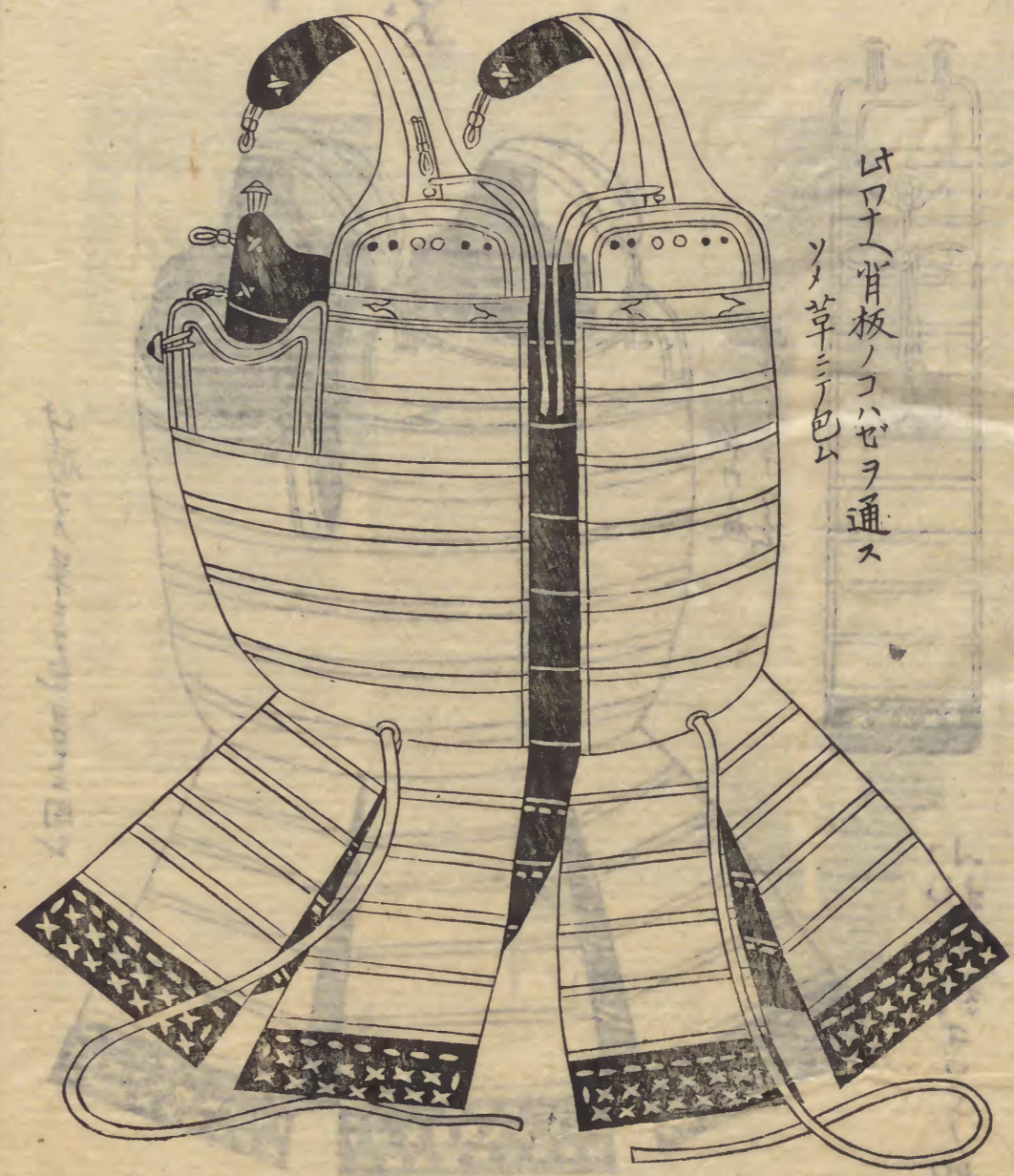


軍三

琢堂藏



同反



此口ノ省板ノコハセヲ通ス  
 ソノ草ニテ包ム

當世具足之図

前

カタアテニコヒレヲ袖ノ  
ゴトリ小札毛羽ニシテ  
付タルモアリソレモコヒレ  
ト云



エリ廻リ

カタアテ

タカヒモ

カタアテ

コヒレ

テウツガイ

サイ付ノクワン

アイヒキノ緒

タカヒモ

ドウゼリホツテトモ

クリシメノ緒

近代草

ズリラケ

サントム

クリシメノ

クワン

ズ前ノ

クサズリ

ヒキ合ノ緒カケラ

クリシメノクワン

後



タカヒモ

コハゼ

合引ノヲ

引合ノ緒

カケラ

ラシ付ノ馬手ノ

クサズリ

クリシメノクワン

引敷ノ草

スリ

同右

ラシ付ノ射向ノ

草ズリ

ウケヅ

ガワタリ

ラシ付ノイタ

キコウスイ

軍

四

家

鉄洞

ワタカミ  
革ナリ

前



テウツカナシ  
打ノベナリ

カケラ

後

包洞ト云ヲヨロヒノ洞ヲ後  
包ムコトハ心得ルハ誤也ヨ  
口ヒハ弦バシリトテ前ノバカリ深  
革ニテ包ナリ何レノ鐘ニモ弦走ナキ  
ハナシ



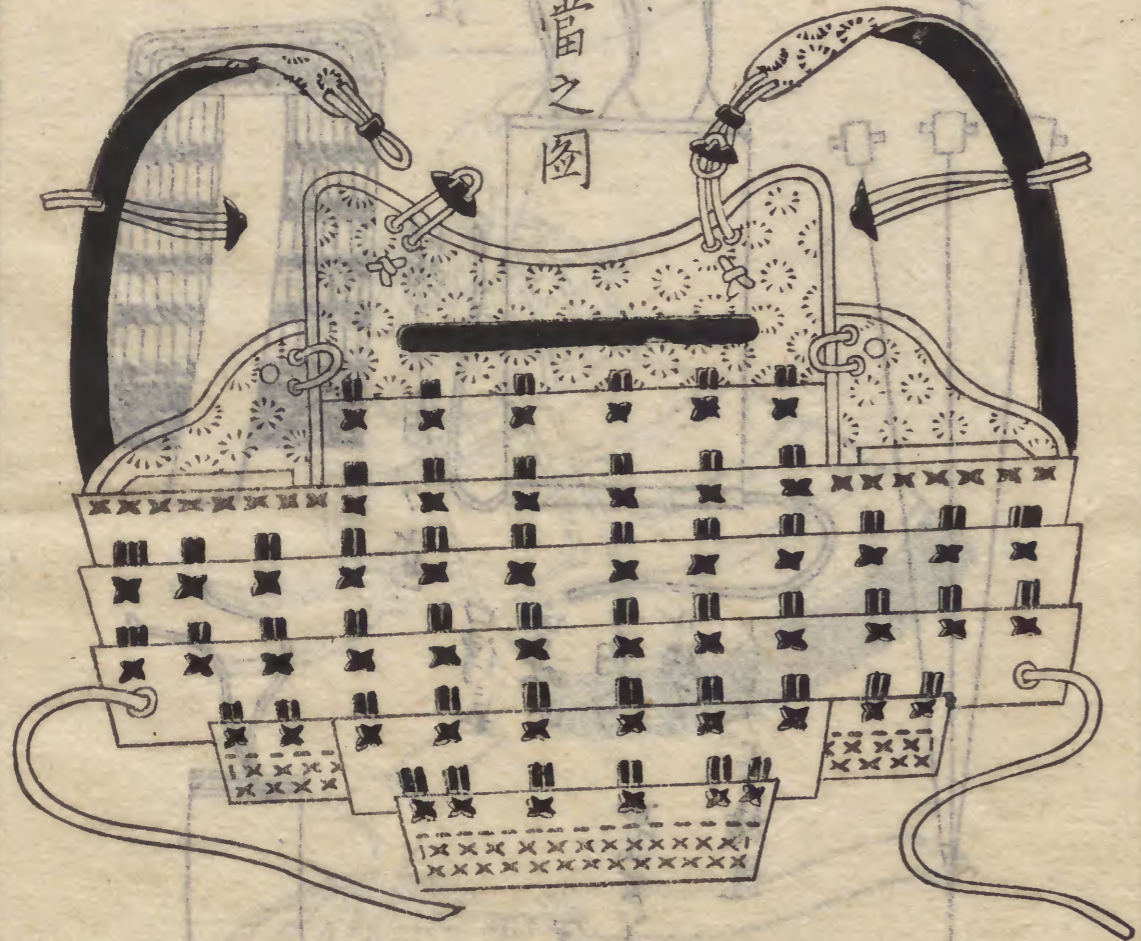
カケラ

ウケラ

ウケラ

物躰ウルシスリ也又是ヲ  
ドンス。シユスソメ革ニテ包  
タルヲ包洞ト云ナリ前後  
尤右物躰ヲ包ナリ

腰當之図

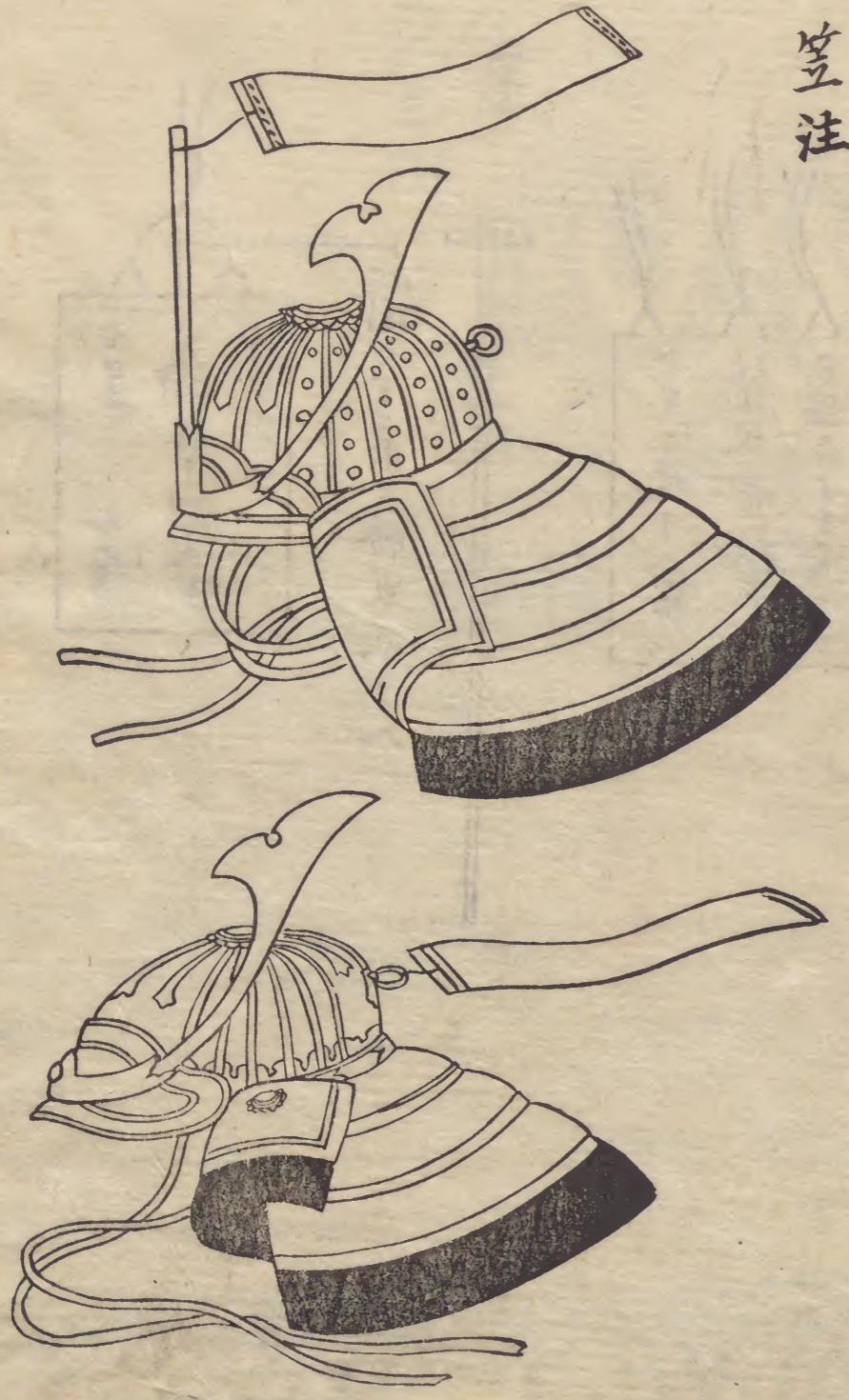


鉄鉢

是ヲハツブリ  
首ハ別也

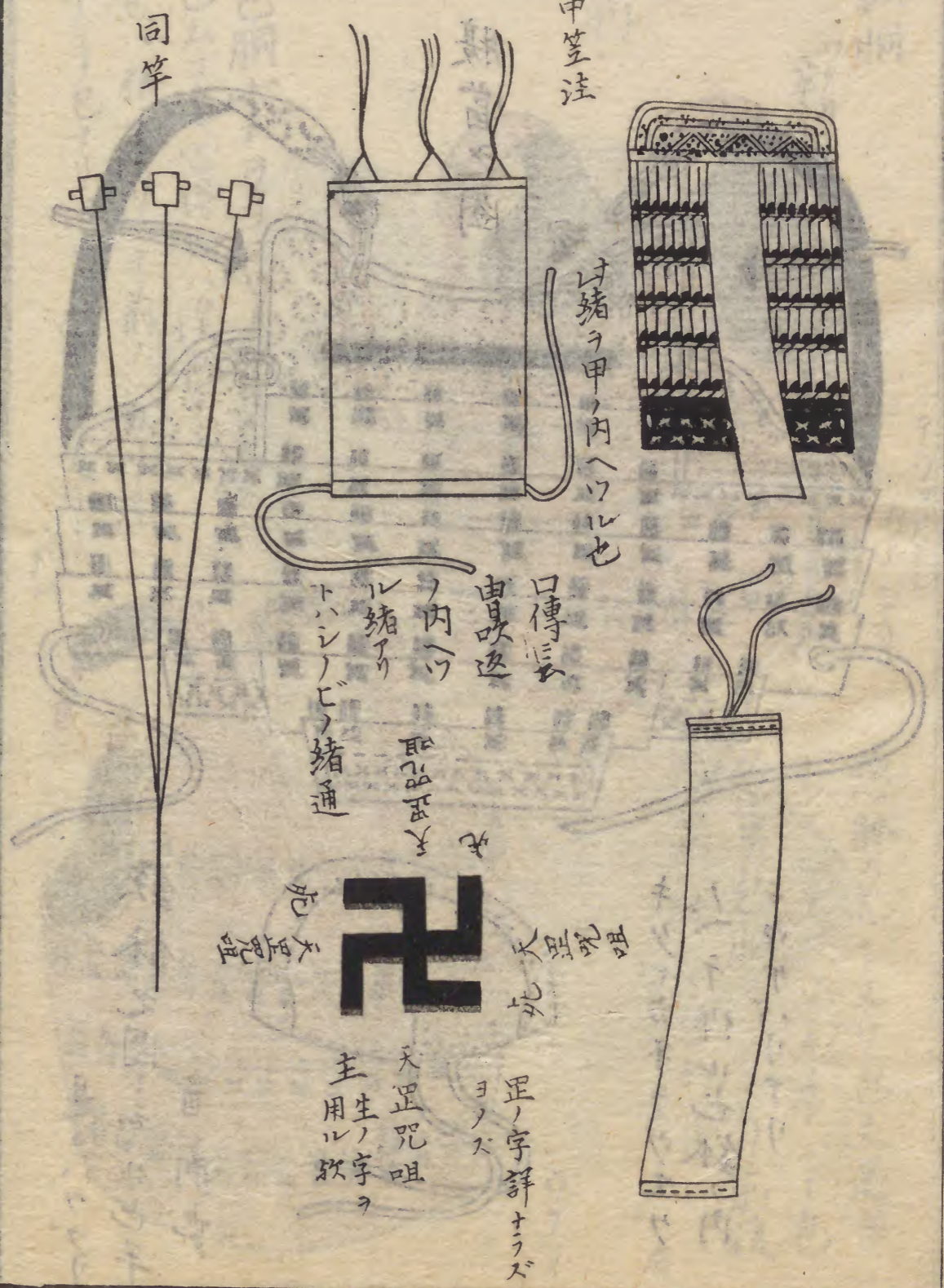
キタヒカ子ヲウスク  
ノベテ作ル也鉢ノ内  
ニウケバリアリ

笠注



同竿

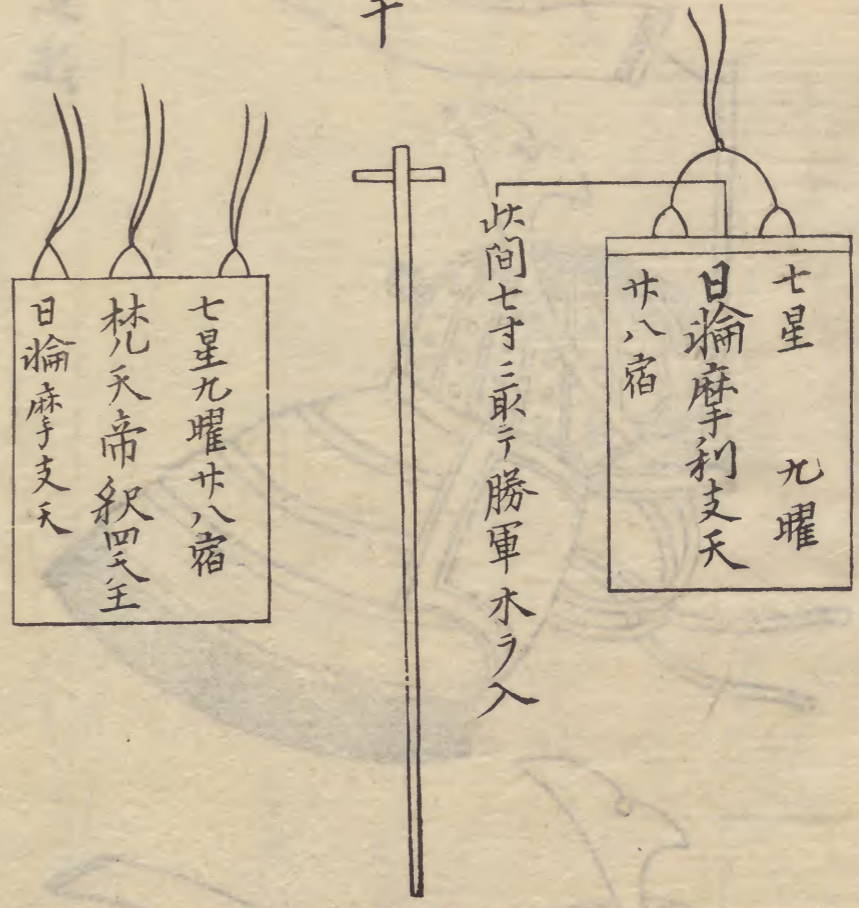
中笠注





中笠注

竿



此間七寸ニ取テ勝軍ホラ入

七星 九曜  
 梵天帝釈四天王  
 日輪摩利支天

七星 九曜  
 日輪摩利支天  
 廿八宿

鎧之図



此所ニ六アリ此六ハ袖ノシツカノ緒ヲ通シテシンドウサ子ヘユヒ付ル

ヲシワケノ板

カカ板

アゲマキ

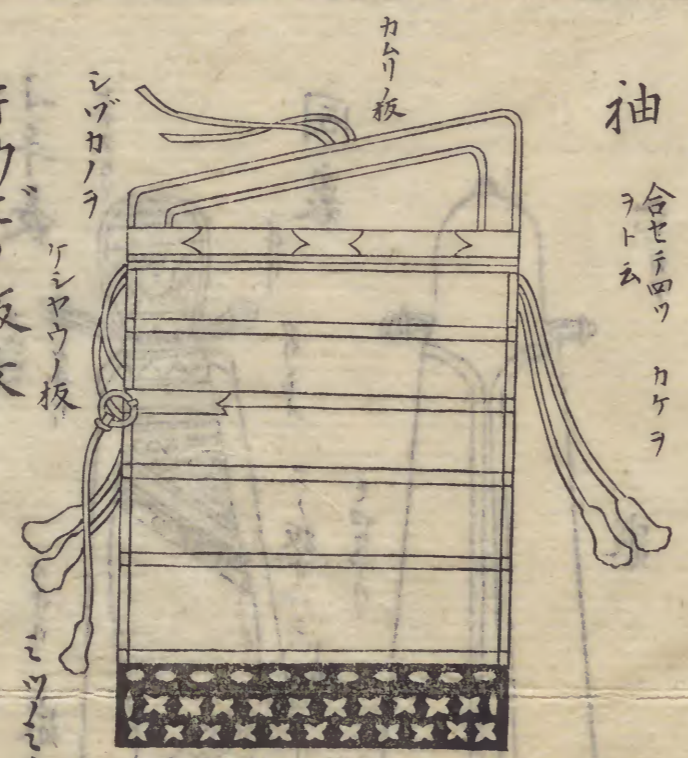
ヒキアゼノラ



キウビノ板表

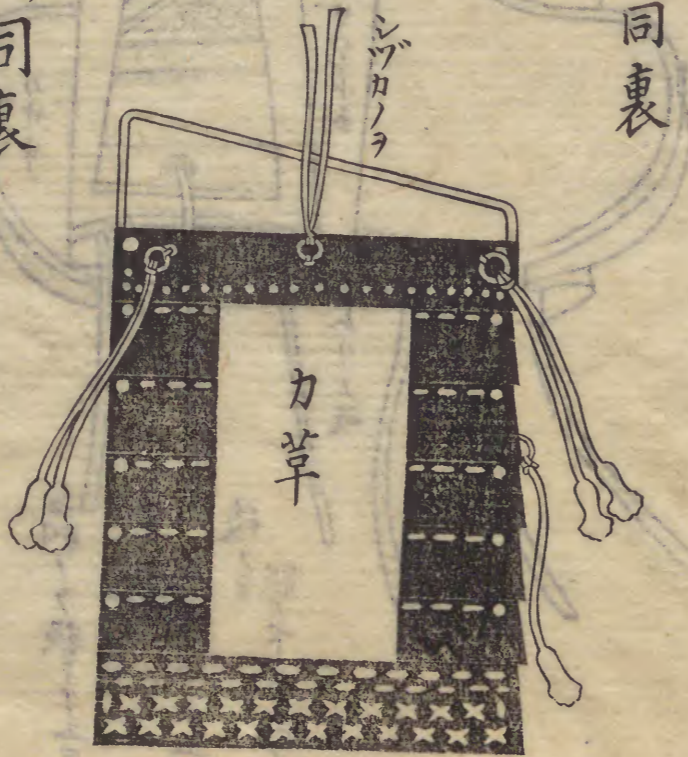


同裏



袖

合セテ四ツ  
ヲト云  
カケラ



同裏

カ草

同アツル図

股楯



ユザリフーウ

ツボノラ

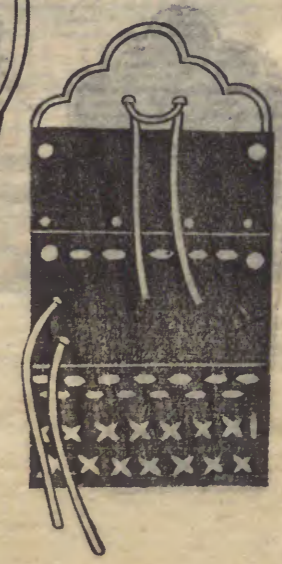
ツボイタ

コシノラ

セシダシノ板表



同裏



小手表

トマスガタ

コハセ

クサリ

小手表袋

クサリ

前ノラ取ニテヲ

中ノラ取ノ

後ノラ

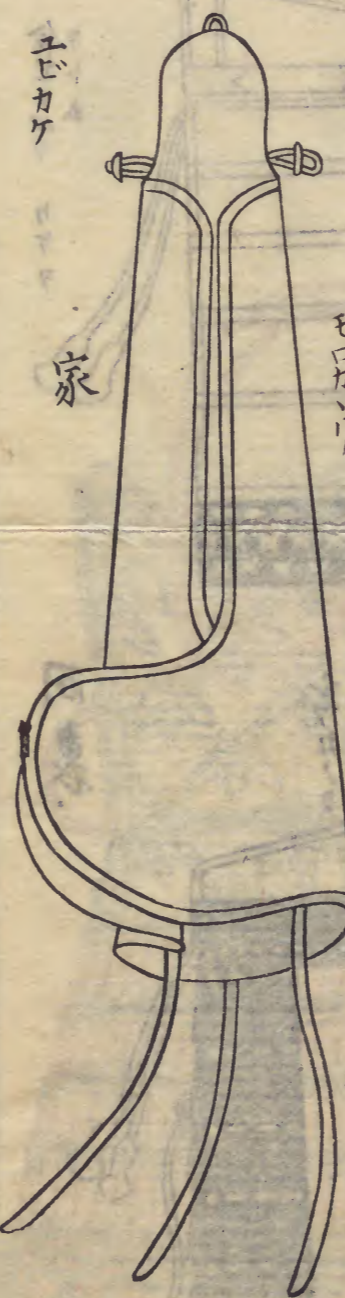
カムリノ板

一ノ板サバント云

二ノ板サバント云

クサリ

同裏



ユヒカケ

家

三

珍堂

